埋蔵文化財
探訪シリーズ

REKIMIN・るぽ

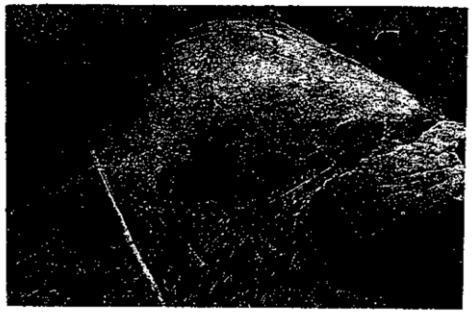
レキミン

〉13〈

龍間の遺跡

太鼓山遺跡・石切場跡・大阪城残石

（その2）



東大阪市との境界に残っている「大阪城残石」

龍間の地に現在のような集落が形成されるのは、龍間の地域内にある一石六地蔵に「永禄十年（一五六七）」の年号が刻まれており、少なくとも戦国時代以降のことと考えられます。しかし、これよりもさらに古い平安時代の土器が、太鼓山遺跡で三個出土しています。

太鼓山遺跡は、現在の龍間の集落から約五百㍍西へはずれた標高二百㍍の山中にあります。

土器が出土した時には、中に人骨が入っており、蔵骨器（骨壺）として使用されていたもので、この時代の墓地があったようです。龍間の集落が形成されるのも、平安時代までさかのぼることができるかも知れません。

近世以降になると、この地域一帯で石材が切り出されていたことがわかっています。特に、元和六年（一六二〇）に始まる徳川秀忠による大阪城修築の時に石材の切り出し場となったようで、工事を請け負った各藩の刻印の入った石が残っています。主な切り出し場所は、ゴルフ場西側の谷一帯で、§・⊖・⓪・△等の刻印石が残っています。ここから切り出された石は谷を利用してふもとまで落とされ、そこから寝屋川の水運で大阪城まで運ばれたのでしょう。

阪奈道路下り線沿いの東大阪市との境界に巨石があります。これにも刻印が見られ大阪城残石、残念石などと呼ばれています。

埋蔵文化財
探訪シリーズ

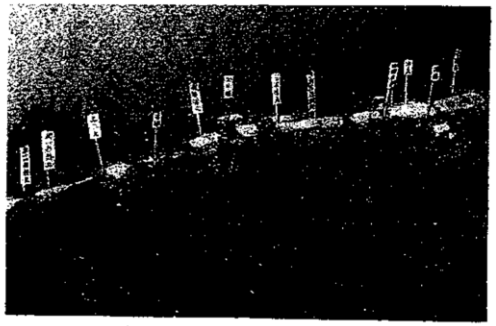
REKIMIN・るぽ

レキミン

〉14〈

飯盛山城跡

（その一）



歴史民俗資料館に展示してある飯盛山城跡模型の頂上部分

河内平野の東方にそびえる標高約三百十四メートルの飯盛山は、北と西は傾斜が急で、東側は深い谷にえぐられた自然の要害をなしています。飯盛山城は、このような地形を利用して作られており、山中の各所には郭と呼ばれる平たんな場所があり、山全体が巨大な砦となっています。

城の範囲は、南北千二百メートル、東西は一番広いところで五百メートルに及んでいます。

ここからの眺めは素晴らしく、河内平野を一望することができ、軍事的には大変重要な地点でした。だから、このような山上に城が築かれたのでしょう。

飯盛山城を築いたのは建武元年（一三三四）の佐々目憲法が最初とされていますが、確かなことはわかっていません。

一四六七年、京都で応仁の乱が起こり、世は次第に戦国時代へと移り変わっていきました。

飯盛山城も、木沢長政、安見直政、畠山高政などが城主となりましたが、永禄三年（一五六〇）には、一時畿内支配に成功した三好長慶が城主となっています。しかし、その支配もわずか四年で終わり、以後三好氏の衰退とともに飯盛山城も城としての役目を終えたようです。